

## [道 徳]

## 「二つの意見」を用いた道徳授業の実践

— 考え、議論する道徳授業をめざして —

近藤多計夫\*

## 1 主題設定の理由

現代の学校において、いじめや不登校、児童の規範意識の低下や人間関係の希薄化など、子どもたちをめぐる問題は山積している。これらの問題の解決には、心の教育が必要であり、学校教育では道徳教育がその役割を担っていると言える。さらに、『小学校学習指導要領』（文部科学省）では、その道徳教育の要として「道徳の時間」を位置付けている。しかし、平成15年度の「道徳教育推進状況調査」（文部科学省）によると、「道徳の時間についての児童生徒の受け止め（高学年）」に関して、「道徳の時間」を肯定的に捉えている児童生徒がどの程度いると思うかという設問に対して、「ほぼ全員」「3分の2」と答えた学校の割合は6割にとどまっている。これは、文部科学省の調査であることを勘案すれば、多くの教師が「道徳の時間」に手応えを感じていないことを表しているのではないだろうか。また、平成24年度の「道徳教育実施状況調査」（文部科学省）によると、「道徳教育を実施する上での課題」という問いに対して「効果的な指導方法が分からない」と答えた小学校・中学校がそれぞれ3割以上、「指導の効果を把握することが困難」と答えた小学校・中学校がそれぞれ4割以上であった。このことから、学校教育現場において効果的な指導が行われているとは言い難い状況である。つまり、本来道徳教育の要でなければならない「道徳の時間」がその役割を果たしていないと捉えることができる。

さらに、小学校では平成30年度から、中学校では平成31年度から道徳の時間が「特別の教科 道徳」として実施され、平成27年度から移行期間に入っている。まだ教科書はできていないものの、教科化はすでに始まったと言ってもよい状況である。今後、ますます道徳教育への期待が高まっていくことは間違いないであろう。

この度の教科化で注目されるキーワードが「考え、議論する道徳への転換」である。『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』（文部科学省）第1章 総説 改訂の経緯の中で、「考える道徳」「議論する道徳」について「発達段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う」と、解説している。さらに、「道徳科の目標」について以下のように示している。

## 〈目標〉

第1章総則の第1の2に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己（中学校：人間として）の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

※下線は筆者

ここで注目すべきは、「道徳的な判断力」が「道徳的な心情」よりも前に示されるようになった点である。つまり、これまでの「教え込み」に対する反省から、「考えさせる道徳」へと質的転換を強く意識していると捉えることができる。それでは、「考え、議論する道徳」とは、どのような授業を言うのだろうか。これまでの道徳授業スタイルで言うならば、価値葛藤いわゆるモラルジレンマを取り入れた討論型の授業は、「モラル・ディスカッション」と呼ばれており、「考え、議論する道徳」の一つの形と言える。しかし、中越道徳教育研究会は「モラル・ディスカッション」の授業には、下記のような問題点や課題があることを指摘している。

\* 柏崎市立田尻小学校

〈「モラル・ディスカッション」の道徳授業の問題点〉

- 指導案レベルでは子どもたちの意見の対立は想定していたとしても、実際の授業では子どもの話し合いの流れによって左右されてしまいがち。
- 教師が想定していた発言や記述が必ずしも子どもから出てくるとは限らない。
- 子どもから出された発言や記述を列挙するだけで授業時間を費やし、十分な検討ができないまま授業を終える。
- 学習に参加し、自分の意見をもつ子が一部になる。

そして、これらの問題点や課題を解決すべく新たな授業スタイルを提案している。それが『「二つの意見」を用いた考える道徳授業』である。これは、教師が予め作成しておいた「二つの意見」を、子どもたちに提示した上で議論していくという道徳授業であり、「二つの意見」を教材（資料）の解釈のためのツールとして与えた上で、子どもたちの思考を促すという授業方法である。教材（資料）に対する考え方を、予め情報として子どもに提示しておくことで、いわゆる「書けない子」への配慮が可能となる。さらに、「二つの意見」を作成するならば、従来からある「読み物資料」をそのまま利用することが可能となる。つまり、資料を途中で切る、結論を隠すという必要はなくなるというメリットのある授業スタイルと言える。

そこで、本研究では、「二つの意見」を用いた道徳授業の実践を行い、「モラル・ディスカッション」による授業との相違点を明らかにし、その有効性を検証することを目的とする。

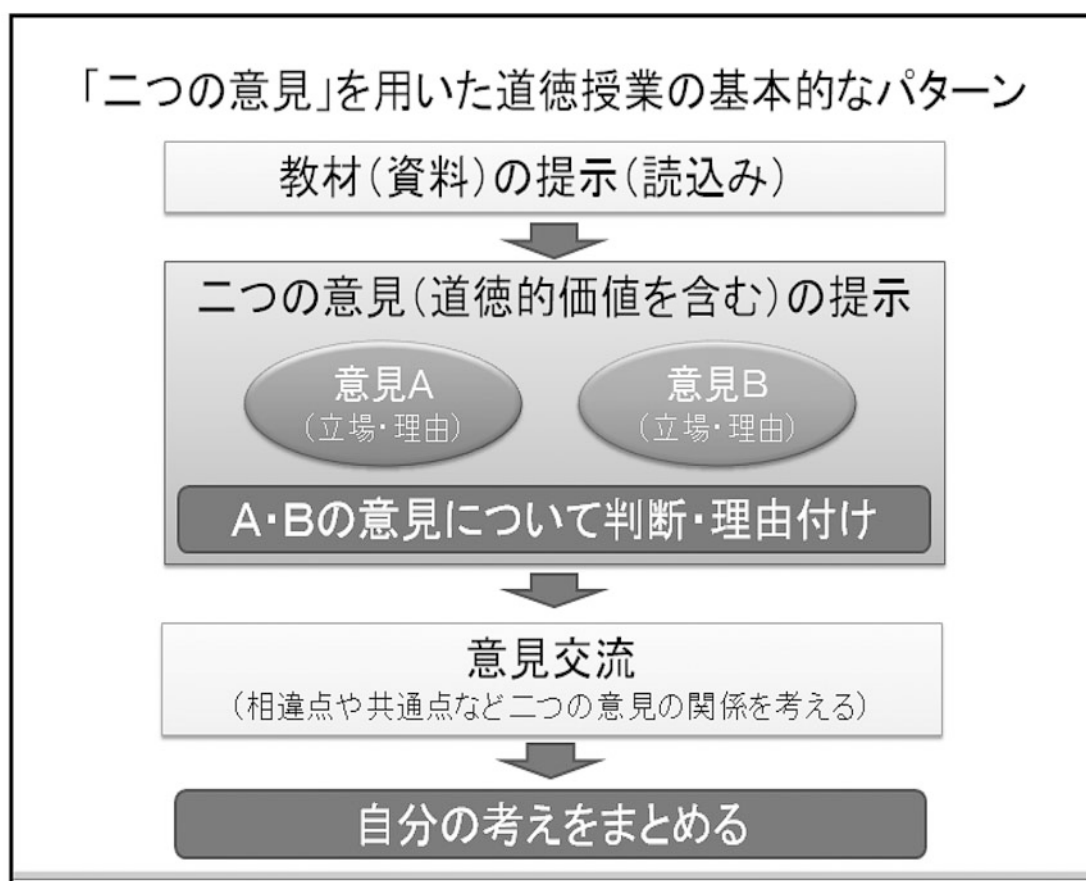


図 1 「二つの意見」を用いた道徳授業の基本的なパターン

## 2 実践の概要

平成27年12月に、柏崎市立田尻小学校の4年生児童37人を対象に行った授業について紹介する。

### (1) 主題名

どうしてきまりやマナーを守るのかな 4 - (1) 規則尊重, 公德心 <C(11) 規則の尊重>

(2) 資料名

「雨のバス停留所で」(わたしたちの道徳 小学校三・四年 文部科学省)

(3) ねらい

資料の登場人物の心情を想像することを通して、約束やきまりを守ることの大切さについて気付くことができる。

(4) 授業の構想

① 資料

「雨のバス停留所で」は、雨降りの日に母親と外出したよし子が、停留所でバスを待つ人の順番を無視して一番に乗り込もうとするが、母親の毅然とした態度を見て、自分のした行為を考え始めるという内容である。後半部分を隠したり加工したりすることなくそのまま提示することにする。

② 導入

教師の範読後、4枚の場面絵を提示して話の内容を想起させる。

発問1 バスが見えた時、よしさんが駆け出してバス停の先頭に並んだのは、どのような思いからでしょうか。

発問2 六番目に並んで待っているよし子は、どのようなことを考えているでしょうか。

③ 展開

次に、いつもとは全然違う母親の横顔に注目させ、次のような「二つの意見」を提示することにした。

発問3 お母さんは、どのようなことを考えながら窓の外を見ていたのでしょうか。

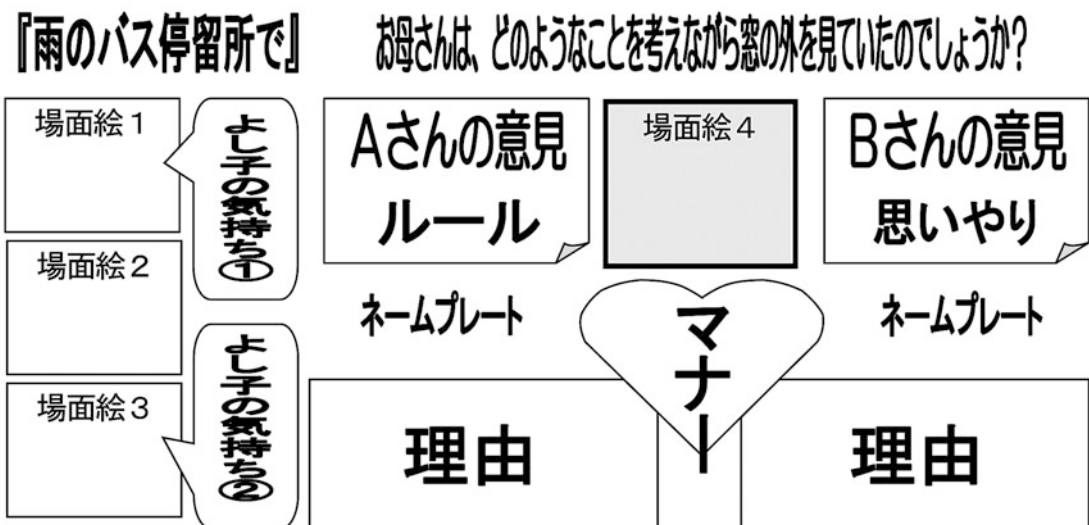
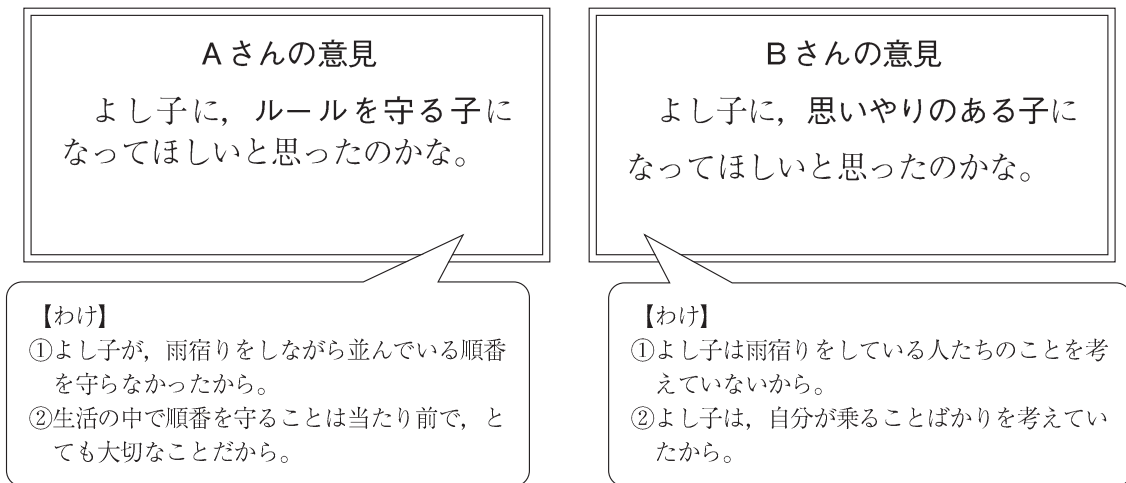


図2 本時の板書計画

### (5) 授業の実際

教師の範読後、板書に挿絵を提示しながら、場面の状況とよし子の気持ちを捉えさせた。そして、「二つの意見」を提示し、どちらの意見に賛成かを判断させた。黒板にネームプレートを貼る際には、「同点だ!」「負けてる!」など勝ち負けを意識する児童の声もあったが、Aさんに賛成が13人、Bさんに賛成が24人、という状況から話し合いがスタートした。全員が判断し、ワークシートには、その理由を記述した。その後、賛成の理由について、次のような発言があり板書した。

#### 〈Aさん〉 ルールを守る子：13人

- ・お年寄りの人もいるのに座ることができないから。
- ・先に並んでいた人がいたのだから、割り込むと同じことだから。
- ・しっかり並ぶという「当たり前」を身に付けてほしいから。

#### 〈Bさん〉 思いやりのある子：24人

- ・みんながうれしい気持ちでいられるから。
- ・思いやりがあれば人が傷つかないから。
- ・お年寄りの人が座れないと困るから。

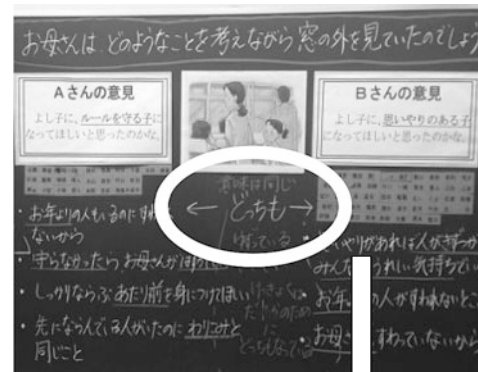


写真 1 本時の板書①

〈A・Bそれぞれの理由が出そろった後の話し合いの様子〉 T：教師 C：子ども

- T：いま両方の理由が出たけど…。
- C1：「当たり前」（という意見）と合体させればいい…。
- T：どっちもいいことの説明して。
- C1：お母さんが立っているから、座っていないという思いやりを当たり前にしてほしいから。
- C2：（拍手）
- C2：C1さんの意見がすごいから。
- C3：合体すればいいじゃん！
- C4：どっちもいいこと…。
- T：ルールを守ることが優しい。思いやりをもつことが優しい。
- T：結局は…、なに??
- C4：結局は、ルールを守ることが結果的にいいことをしているからどっちも意味は同じだよ。
- T：先生何も言ってないのにまとめてくれたね。ありがとう。
- C3：だれかのためになっている。
- （みんなで拍手）
- T：最後、結局は誰かのために思いやりを持つてるし、優しい気持ちをもっているってことなんだね。

上記のように、それぞれの理由を聞いていく中で、C1が「当たり前」という言葉に注目し、それは、A・B両方に共通するのではないかと発言したことをきっかけに、「ルール」と「思いやり」の重なりを目を向けるようになった。子どもたちは、A・Bの対立や勝ち負けではなく、それぞれの道徳的価値の大切さに気付くことができた。「ルールも思いやりのどちらも、結局は誰かのためになっている」ことを全体で共有し授業を終えた。

## 3 考察

本実践における児童の姿から、「二つの意見」を用いた道徳授業には、次のような長所があると考えられる。

—モラル・ディスカッションとの比較—

### (1) 全員が自分の考えを持つことができる

児童は「二つの意見」で示された「ルール」「思いやり」というキーワードをもとに、母親の思いを想像し、自分なりの考えをもった。そして、その考えをもとに学級全員が授業に参加することができた。

(2) ねらいとする道徳的価値からぶれることなく思考できる

理由の記述では、本時でねらいとした道徳的価値「規則尊重・公德心」から逸脱することはなかった。さらに「思いやり・親切」を加えながら思考し、話し合うことができた。

(3) 討論の終末場面

モラル・ディスカッションによる道徳授業では、「～べき」「～べきでない」と行為の選択から考えを対立させることになるが、本実践では、それぞれの考えのよさや共通点に目を向けさせることができる。そのため、児童がその後の「結果や答え」に固執し勝ち負けにこだわるようなことは

ない。学級全員で考えを出し合っって討論をまとめることが可能となる。子どもたちが知恵を出し合うことで、「なるほど!」と温かい雰囲気ですべてを終えることができた。子どもたちは、その表情からも満足感を得ていたようだった。



写真 2 本時の板書②

4 成果と課題

- ・「考え、議論する道徳授業」を成立させるには、まずは学級の全員が同じ土俵に立たなくては始まらない。「二つの意見」のどちらかを選ぶことから考えることが始まり、議論になる。そして、教師がねらった道徳的価値に迫っていくことができる。「二つの意見」を用いた道徳授業の有効性を明らかにすることができた。
- ・「二つの意見」をどんな内容にするのか吟味が難しい。理由の提示の有無など、学級規模や児童の実態への対応が難しい。さらに実践を重ねることで、その有効性を明らかにしていきたい。

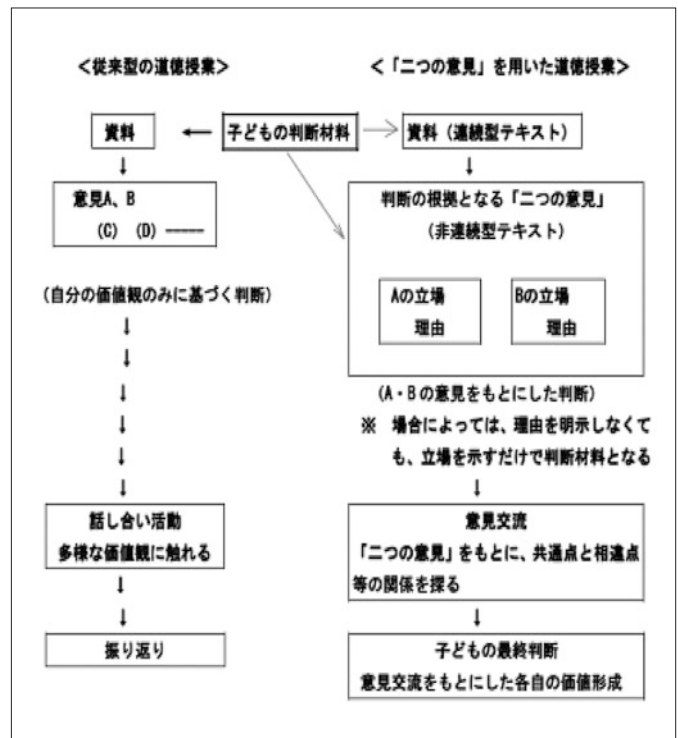


図3 モラル・ディスカッションとの相違点

5 参考・引用文献

- ・文部科学省「小学校学習指導要領」2008年
- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編」2015年
- ・中野啓明, 中越道徳教育研究会「心情面にかかわる道徳資料を用いたP I S A型道徳授業モデル開発」2015年

